

めのとが思ひきるは、せめていかせん、かいまやくの女房さへ身をなげ、る社哀なれ、
〔太平記十〕赤橋相模守自害事附本間自害事

十八日元弘三年五月ノ晚程ニ、洲崎一番ニ破レテ、義貞ノ官軍ハ、山内マデ入ニケリ、懸處ニ本間山城

左衛門ハ、多年大佛奥州貞直ノ恩顧ノ者ニテ、殊更近習シケルガ、聊勸氣セラレタル事有テ、不被
免出仕、未己ガ宿所ニゾ候ケル、己五月十九日ノ早旦ニ、極樂寺ノ切通ノ軍破レテ、敵攻入ナンド
聞ヘシカバ、本間山城左衛門、若黨中間百餘人、是ヲ最後ト出立テ、極樂寺坂ヘゾ向ヒケル、敵ノ大
將大館二郎宗氏ガ三萬餘騎ニテ扣タル真中ヘ懸入テ、勇誇タル大勢ヲ、八方ヘ追散シ、大將宗氏
ニ組ント、透間モナクゾ懸リケル、三萬餘騎ノ兵共須臾ノ程ニ分レ靡キ、腰越マデゾ引タリケル、
餘リニ手繁ク進デ懸リシカバ、大將宗氏ハ取テ返シ、思フ程戰テ、本間ガ郎等ト引組デ、差違ヘテ
ゾ伏給ヒケル、本間大ニ悦テ、馬ヨリ飛デ下リ、其頭ヲ取テ鋒ニ貫、貞直ノ陣ニ馳參ジ、幕ノ前ニ畏
テ、多年ノ奉公多日ノ御恩、此一戰ヲ以テ奉報候、又御不審ノ身ニテ空ク罷成候ハ、後世マデノ
妄念共成ヌベウ候ヘバ、今ハ御免ヲ蒙テ、心安冥途ノ御先仕候ハント申モハテズ、流ル、泪ヲ押
ヘツ、腹搔切テゾ失ニケル、三軍ヲバ可奪帥トハ、彼ヲゾ云ベキ、以德報怨トハ、是ヲゾ申ベキ、
略

〔太平記十六〕新田殿湊河合戰事

數萬ノ敵勝ニ乗テ、是ヲ追事甚急ナリ、サレ共何モノ習ナレバ、義貞朝臣、御方ノ軍勢ヲ落延サセ
ン爲ニ、後陣ニ引サガリテ返合セ、戰レケル程ニ、義貞ノ被乗タリケル馬ニ、矢七筋マデ立ケ
ル間小膝ヲ折テ倒ケリ、義貞求塚ノ上ニ下立テ、乗替ノ馬ヲ待給ヘ共、敢テ御方是ヲ知ザリケル
ニヤ、下テ乗セントスル人モ無リケリ、敵ヤ是ヲ見知タリケン、即取籠テ是ヲ討ントシケルガ、其
勢ニ辟易シテ、近クハ更ニ寄ラザリケレドモ、十方ヨリ遠矢ニ射ケル矢、雨ヤ雹ノ降ヨリモ猶繁